

松村神父の勝手に独り言

2020年4月12日 復活の主日に向けて

今回の新型コロナウイルスは自然災害と位置づけてもよいのではないだろうか。という視点でここ最近に起こった災害を思い起こし、思いめぐらしてみたい。

阪神淡路大震災や東日本大震災の時、突然それは人々に襲い掛かり、家を壊し、家族を引き離し、財産を奪い、命すら奪って行ってしまった。残された家族にとってそれはどれほどの痛みだっただろう。『山椒大夫』の話の中で引き離された親子の事を思い起こします。居ても立っても居られないほどの精神的痛みと元に戻らない傷が与えられ、その中でも生き続けなければならぬ状態にされた親子。イエスが飼い主のいない羊の群れを見て「憐れに思う」気持ちはまさにその状態でした。“はらわた”が揺れ動くほどの悲しみ。今なお特に東日本大震災被災者においてはその被害から癒されていない人々が多く存在しています。死に分かれた家族をまだ帰ってくると信じて待っている人もいます。でも事実は元に戻りません。町並みは綺麗になっても、人の体(精神的な平安も含め)は元通りにはなり辛いのです。

今回のコロナ出来事も、世の中では多くの人々がその苦境に立たされています。被害にあっている人々もおり、いつ自分の身に起こるか分からない状況に立たされてもいます。今はまだ自分にその苦しみが襲い掛かっていないだけで、それはいずれやってくるかもしれません。またその中で社会から孤立している人もたくさん出てきています。多くの高齢者や病人、新型コロナウイルスを恐れて家に留まっている人たちがたくさんいます。私は最後にその方々のもとに向かうことすら叶えられませんでした。お別れを言うこともできずに去らなければなりません。次の人に委ねなければならぬのですが、それすらすぐに約束を果たしてくれるわけでもありません。今私は、それぞれの方々と最後に会った時のことを思い浮かべています。何を語ったか、何を伝えたか、どのように分かれたか、思い残す言葉はなかったか。あの時が最後の言葉だったのだなあ。

先日ある神父様からこんな話を聞きました。3月に入り一人の女子中学生の言葉。「〇〇ちゃんと喧嘩してしまいました。卒業式までには仲直りをしてお別れをしたかった。それなのに新型コロナのおかげで謝ることも、仲直りをすることもできないままお別れとなってしまう。」と。この中学生にとって最後の機会を逃してしまい、もう会うことすらできない悔しさと悲しさが彼女を襲ったとのこと。新型コロナも怖いけど、それ以上に彼女の心を引き裂いてしまった。新型コロナのせいにすることはできるが、自分の至らなさに大きく傷ついてしまった方が何倍もつらいのです。後に回す事の怖さ。私が何度も皆さんに伝えてきた一つは、“今を生きる”こと。イエス様はいつも“今”の人である事です。計算をしても、計画をしても、突然の災害は待ってくれないし、人間の計画など簡単に壊してしまいます。

「今、目の前の出来事に、誠実に生きる。」これは簡単な言葉ではありません。しかし、これがキリスト者のモットーなのだと感じます。

旧約時代のユダヤ教の律法学者の中には伝統に目がくらみ、自分の地位や名誉、自分の経験や立場を守るためにイエスを死に追いやってしまった人々が居ました。過去に目を止めてしまう危険性。しかしイエスは「復活」という、理屈ではない出来事を通してそれを打ち破り、いつも一瞬一瞬の神の導きを願い実現しようとしてきました。そして腰を落ち着かせて神の視点、愛の視点でしっかりと将来を見据えて考え、計画をすることも大切であることを語っています。決して過去ではないのです。復活の出来事が語るのは、墓の前で過去の故人を思い起こすことではありません。今自分に何を問われているのか？という将来に向けた希望の問いかけであるのです。墓の石が取り除けられて、そこにイエスがいなかったのはそういう事なのです。「私のお墓の前で泣かないで下さい！」墓の中を一生懸命探しても、そこに答えはありません。「ガリラヤに先に行って待っている」という将来への“希望”と、それを信じる“信仰”そしてそれを実現する“愛”そのものによるのです。

改めて今私たちにとって“常に今”を思い起こさせ、悔いなく目の前の出来事に向かっていく姿勢が与えられているのではないのでしょうか。もう会えない人がいるかもしれないという中で、“一瞬一瞬を輝かせる”姿をキリストから学びましょう。今孤独になっている人に声をかけましょう。後悔しないように。今からでもできる事はたくさんあります。

.....という独り言でした。